エカテリーナ期 - ナポレオン戦争期の ロシア詩の中のヴォルガ

―「ロシアの母なる川」が誕生するまで ―

鳥　山　祐　介

1. はじめに

「ヴォルガ、ヴォルガ、生みの母よ、ヴォルガ、ロシアの川よ」[1]。ロシアで一般に浸透しているヴォルガ川のイメージは、歌謡『ステンカ・ラージン（原題：島かげから水脈へ）』の人口に膾炙したこの一節に集約されているだろう。ヴォルガはロシア全体を象徴する川、ナショナル・シンボルとして広く認識されており、この歌にも現れる「ロシアの川」「母なる川」といったイメージは、19-20世紀を経て現在に至るまでヴォルガ表象の核を成してきた。

例えば、スターリングラード攻防戦を描いたコンスタンチン・シーモノフの小説『夜となく昼となく』（1943-44）では、大隊を率いてスターリングラードへ向け移動していた主人公サブーロフ大尉が、ヴォルガに達した際次のような感慨を抱く。「子供の頃、学校に通っていた頃から今までの全人生において、ヴォルガは彼にとって何か深遠なもの、限りなくロシア的なものであった。だから今こうして自分がヴォルガの岸に立ってその水を飲んでいることや、対岸にドイツ兵がいることは、彼には信じられない、野蛮なことであると思われた」[2]。ここではヴォルガが、その傍らに外国人が存在し得ることすら信じ難い、「限りなくロシア的な」川と考えられているのである。

とはいえ、ロシア最大の流域面積を誇る川であることからも容易に察せられるように、本来この川の沿岸地域は一様に「ロシア的」というわけではない。それどころか、この地域は古来よりきわめて多文化的な空間であった。

このことは、『原初年代記』が伝えるキエフ大公ウラジーミルのキリスト教受容をめぐるエピソードの中で既に象徴的に示されている。よく知られるように、ここでウラジーミルはイスラーム、ローマのキリスト教、ユダヤ教といった複数の選択肢の中からビザンツのキリスト教（正教）を選び取るが、ここでイスラームを薦める「ボルガリ」とユダヤ教を薦めるハザール人は、いずれもヴォルガ沿岸地域を拠点としていた人々である。即ち、正教の受容という、後のロシア文化の「ロシア性」を決定づけることになった歴史的局面において、ヴォルガ沿岸の人々は「異教徒」の代表として描き出されているのである。[3] それから千年

1　Русские народные песни. Мелодии и тексты. / Под ред. Бекетова. М., 1999. С. 41.　なお、この歌の歌詞にはいくつかのヴァリアントが存在する。

2　*Симонов К. М.,* Дни и ночи. М., 1984. С. 17.

3　國本哲男、山口巌、中条直樹他訳『ロシア原初年代記』名古屋大学出版会、1987年、99-100頁。この点に関しては三浦清美氏の報告「歴史的 ヴォルガ―ヴォルガがロシアの川となるまで」（「現代ロシア文学研究／ヴォルガ文化研究合同研究会」2011年 3 月 6 日、於北海道大学スラヴ研究センター）から示唆を受けた。またヴォルガ・ブルガール（ボルガリ）に始まる沿ヴォルガ・ウラ

以上の時を経た現代でも、この地域にはタタール人やチュヴァシ人など多くの「非ロシア」民族が暮らしている。このように、ヴォルガには純然たる「ロシアの川」とみなすのは難しい側面がある。

そもそも川、山、湖など、本来自然の所産であるものが特定の国家や国民と結び付けられるに際しては、文学表象を通したイメージ構築など、ある種の知的営為が介在している。(4) 本来エキゾチックな連想を伴ってもよいはずのヴォルガが専らロシア的な川というイメージに回収されていく過程にも、そうした背景を想定することができよう。特に川の場合は、山や湖などと比べて全体的なイメージ、全体を一望した上での視覚的イメージが描きにくいため、その表象も局所的な印象や想像的な要素から構成されることが多くなる。ロシア人の心理的な故郷としてのヴォルガのイメージも、文学的想像力が様々な要素を取捨選択していく中で作り上げられたものなのである。

後述するように、カラムジンの詩『ヴォルガ』（1793）などヴォルガを扱った18世紀末の文学作品では、沿岸地域の多文化性がしばしば前面に出ている。即ち、「ロシアの川」「母なる川」としてのヴォルガのイメージはそれほど古いものではなく、少なくともこの時期以降に現れたものと推察される。本稿は、そうしたヴォルガの文学的イメージの形成において一つの転機となった時代を18世紀末から19世紀初頭と仮定し、詩を中心とする様々な文学作品に現れたヴォルガ表象の比較検討を通して「ロシアの母なる川」としてのヴォルガ像の誕生を歴史的に跡付けることを目指す。

ロシア詩におけるヴォルガ表象の問題を扱い、本稿と同じ時期を検討対象とした研究は、意外にも多くない。ペトロフの論稿は、ヴォルガを主題とするスマローコフとカラムジンの詩を取り扱っており、18世紀末から19世紀初頭の文学に見られる規範性から歴史性へ、抽象性から具体性へという流れの中に二作品を位置付けている。(5) オデッスキーの論稿「ヴォルガ、神秘の川」は、ステンカ・ラージン伝説を鍵としつつ古今の「ヴォルガ・テクスト」を読み解くものである。本稿で言及するドミートリエフの詩にも触れており、ラージン伝説をヴォルガの境界性、ユーラシア性と結びつける構想は興味深いが、ここで言う異国的要素は主として伝説中のラージンとペルシアの娘という対立構図を念頭に置くもので、本稿とはやや視点を異にする。(6) また、ラトニコフの論稿「ロシアの川：詩と政治」は、ロモノーソフからチュッチェフに至るまでの詩作品に現れるロシアの川の表象を、詩人たちのイデオロギー認識を映し出すものとして読み解く研究であり、ヴォルガの問題を特化して扱っては

ル地方のムスリムの歴史に関しては濱本真美『共生のイスラーム：ロシアの正教徒とムスリム』山川出版社、2011年に詳しい。

4 例えば、トビが述べるように、富士山が日本のナショナル・シンボルと認識されていくのは近世日本の言説においてである。ロナルド・トビ『「鎖国」という外交』小学館、2008年、第 6 章。また、近代日本における日本の風景の受容を巡る事情に関しては、大室幹雄『志賀重昂「日本風景論」精読』岩波書店、2003年を参照。

5 *Петров А.В.* «Волжский хронотоп» в двух одах XVIII века (о путях разрушения нормативного художественного мышления) //Духовная жизнь провинции. Образы. Символы. Картина мира: Материалы Всероссийской научной конференции (г. Ульяновск, 19-20 июня 2003 г.). Ульяновск., 2003. С. 30–38.

6 *Одесский М.П.* Волга – колдовская река: от «Двенадцати стульев» к «Повести временных лет» // Геопанорама русской культуры: Провинция и ее локальные тексты. М., 2004. С. 605-625.

いないものの、多くの示唆を与える。[7]

これらの論稿をはじめ、本稿と視点や問題意識を共有する先行研究は数多く存在する。しかしながら、18世紀から19世紀初頭のロシア詩におけるヴォルガ表象の系譜を網羅的に辿った研究は、筆者の知る限り現時点では存在せず、その空隙を多少なりとも埋めることが本稿の課題の一つとなる。なお、フォークロアからの影響に関する問題は、紙幅その他の制約から今後の研究に委ねることとしたい。

2. 帝権翼下のヴォルガ：1740 - 60 年代

2.1 帝国地図のイメージの中で

18世紀初頭にロシア帝国の礎を築いたピョートル一世が国家の命運を賭けて取り組んだ課題の中には、海軍の増強、対外貿易や国内交通の便を図るための水運の整備など、水に関わる事業が多く含まれていた。

一方、近代ロシア文学の黎明期である18世紀は頌詩が隆盛を見た時代であった。特にこのジャンルの中心である「荘厳頌詩 торжественная ода 」「称賛頌詩 похвальная ода 」は、ロシア国家、即ちピョートル以降の近代ロシア帝国や、君主を頂点とする貴顕の人々の賛美を趣旨としていたことで知られる。

ヴォルガ表象の系譜との関連で注目されるべきは、上記の背景より、これらの頌詩でもピョートルの事績と関わりの深い水、海、川といった主題にたびたび関心が向けられたことである。そして、ラトニコフが整理するように、ロモノーソフをはじめとする18世紀半ばの頌詩において、海軍や対外貿易と結びつく「海」の主題は大国ロシアの対外的な力を称え、通過する土地、流域面積の広大さを想起させる「川」の主題はロシア帝国の版図の広大さを称揚する機能を担うこととなった。[8]

ただし、ネヴァ川はやや特殊な位置を占めていた。ペトロフが指摘するように、この川はロモノーソフの1742年及び1750年の頌詩、ポポフスキーの『冬の始まり』（1750－51）、トレジアコフスキーの『イジェルの地と帝都サンクト・ペテルブルクの讃歌』（1752）など多くの頌詩で歌われ、「皇帝の川」として例外的に地域的特徴を付与された。[9] 帝都サンクト・ペテルブルクの川であるネヴァの形象は、帝国の広大な版図のイメージを通してというより、帝権の直接的な称賛という機能を担ったものと言うことができる。また、この川の名がロシア国家の換喩として用いられることもあった。例えば、七年戦争を題材にしたスマローコフの頌詩（1758）では、同盟国同士であったロシア、オーストリア、フランスがそれぞれ「ネヴァ、ドナウ、セクアナ」と表現されている。[10]

---

7 *Ратников К.В.* Русские реки: поэзия и политика. Идеологический компонент гидронимных образов в лирике от Ломоносова до Тютчева // Вестник Челябинского университета. Серия 2. №1 (15). 2004. С. 56-66.

8 *Ратников.* Русские реки: поэзия и политика. С. 57.

9 *Петров.* «Волжский хронотоп». С. 31.

10 *Сумароков А.* Оды торжественныя. СПб., 1774. С. 13. В кн.: *Сумароков А.* Оды торжественныя. Елегии любовныя. Репринтное воспроизведение сборников 1774 года. М., 2009.

一方、この時期の頌詩にヴォルガへの言及が現れた代表的な例としては、女帝エリザヴェータの即位記念日に寄せたロモノーソフの1747年および1748年の頌詩から以下の個所を挙げることができる。

Сия Тебе единой слава,	君主よ、この栄光は
Монархиня, принадлежит,	ただあなたお一人のおかげ
Пространная Твоя держава	おお、あなたの広大で偉大な国は
О как Тебе благодарит!	どれほどあなたに感謝していることか!
Воззри на горы превысоки,	天を突く山々を見よ、
Воззри в поля Свои широки,	ヴォルガ、ドニエプル、オビの流れる
Где Волга, Днепр, где Обь течет:	広漠とした平原を見よ、
Богатство, в оных потаенно,	それらが内に秘めたる富は
Наукой будет откровенно,	科学の力で明るみに出され
Что щедростью Твоей цветет. [11]	あなたの恵みで惜しみなく花開く
В полях, исполненных плодами,	様々な果実があふれる平原に、
Где Волга, Днепр, Нева и Дон,	ヴォルガ、ドニエプル、ネヴァ、ドンが
Своими чистыми струями	その清らかな水流のせせらぎの音で
Шумя, стадам наводят сон,	家畜らに眠気を催している平原に
Седит и ноги простирает	彼女（ロシア）は腰かけ、その足を
На степь, где Хину отделяет	我々と中国を隔てる壁が広がる
Пространная стена от нас; [12]	ステップの方まで伸ばしている

これらの個所に現れるヴォルガの名は、「ロシア帝国を流れる川のカタログ」を構成する一要素に過ぎず、ヴォルガ、ドニエプル、ネヴァといった個々の川の名に特別な意味は与えられていない。イーリーが述べるように18世紀末まで「視覚的なロシアの空間イメージは専ら地図によって得られた」[13] が、これらの川の名の列挙も、広大なロシア帝国の地図のイメージを現出させる点に意義を有するものといえる。

ヴォルガを個別に主題化した18世紀半ばの文学作品の数少ない例としては、スマローコフの『頌詩』（1760）がある。この作品は、様々な変転を経験しつつ最終的に「永遠」のうちに消えていく「時代」を、多くの土地を流れカスピ海に注ぎ込んでいくヴォルガになぞらえたものである。

---

11 Ода на день восшествия на Всероссийский престол Ея Величества Государыни Императрицы Елисаветы Петровны 1747 года // *Ломоносов М.В.* Полное собрание сочинений. Т.8. М.; Л., 1959. С. 202-203.

12 Ода на день восшествия на престол Ея Величества Государыни Императрицы Елисаветы Петровны 1748 года // *Ломоносов.* Полное собрание сочинений. Т.8. С. 222.

13 Ely, Christopher. *This Meager Nature: Landscape and National Identity in Imperial Russia*. DeKalb, Northern Illinois UP, 2002. P. 33.

Долины, Волга, потопляя,	数々の谷を水に浸しながら
Себя в стремлении влечешь,	ヴォルガよ、お前は奔流となって進んでいく
Брега различны окропляя,	あちこちの岸辺を潤しながら
Поспешно к устию течешь.	河口に向かい急ぎ流れていく
Ток видит твой в пути премены,	お前の流れはその道中に変転を
Противности и блага цепь;	抗う力と恵みとを続けて目にする
Проходишь ты луга зелены,	お前は緑なす草原を通り抜け
Проходишь и песчану степь.	砂地のステップも通り抜ける
Век видит наш тому подобно	同じように我々の時代もその道中に
Различные в пути следы:	様々な痕跡を目にすることになる
То время к радости способно,	我々に喜びを与える時を目にすることもあれば
Другое нам дает беды.	災いをもたらす時を目にすることもある
В Каспийские валы впадаешь,	いとも栄えあるあまたの川の母よ
Преславна мати многих рек,	お前はやがてカスピ海の高波に出会い
И тамо в море пропадаешь, —	海の中へ、永遠のうちに消えていく
Во вечности и наш так век. [14]	そしてまた我々の時代も同じように

スマローコフのこの作品は、ロモノーソフ『神の偉大さについての夕べの瞑想』などと同じく既成の普遍的な理念を抽象化、一般化された諸体験や風景描写を用いて説く「道徳哲学頌詩 нравственно-философская ода 」の系譜に連なるものである。ここでは時の流れや移りゆく人間の営為が川のメタファーで表現されるが、これは18世紀後半のロシア詩によく見られる因習的な修辞であった。[15]

この詩には、「地方色」を含む表現もいくつか現れている。即ち、ヴォルガやカスピ海といった固有名詞が明示されていることに加え、「砂地のステップ」というヴォルガ沿岸の具体的イメージと結びつく表現も用いられている。とはいえペトロフも指摘するように、スマローコフの芸術観を支配していたのは「教訓性と非歴史性」であり、古典主義的規範に依拠しつつ彼がこの詩で優先的に表出しようとしたのはあくまで抽象的、普遍的な理念であった。[16] ヴォルガが主題とされながら「ロシア」への言及が現れていない点も、この詩のそうした非歴史的な性格を強めている。

一方、この詩の4連目に現れる「あまたの川の母」という表現は、後のヴォルガ表象との関連で興味深い。この「母 матерь / мать 」という語は、18世紀ロシアの荘厳頌詩のジャンルで女帝への呼びかけとして頻繁に用いられたものである。正教会の祈祷における生神女マ

14 *Сумароков А.П.* Избранные произведения. Л., 1957. С. 102.

15 「時間＝川」というメタファーを用いた代表的な例としては、デルジャーヴィンの最後の詩とされる『時間の川は…Река времен...』（1816）がある。

16 *Петров.* «Волжский хронотоп». С. 32.

リアへの呼びかけとピョートル一世の公式な称号「祖国の父 Отец отечества 」からのアナロジーとされるこの表現は、トレジアコフスキーやロモノーソフと同様にスマローコフも荘厳頌詩で用いた。[17] ヴォルガに対するこの形容がそうした頌詩の伝統を踏まえているとは断言できないが、後にカラムジンを経て19世紀に受け継がれる「母としてのヴォルガ」という文学的形象が早い時期に現れた例として、注目に値する。

このように、スマローコフの頌詩に描かれたヴォルガは、後の時代のヴォルガ表象と断絶した点も多く含むものの、ヴォルガを単独に主題とした点、「母」としてのヴォルガという形象が現れている点において画期的なものと言える。

2.2 女帝エカテリーナのヴォルガ行幸

18世紀後半のロシアにおけるヴォルガ表象を考える上で看過できないのが、エカテリーナ二世が治世の初期に行ったヴォルガ河畔への視察旅行である。

1767年 5 月 2 日、女帝は2000人の随行員を伴ってトヴェーリを出発し、ヴォルガ周航の旅に出かけた。[18] イワン・チェルヌィショフ率いる船団は10隻の船から成っており、中でもこの視察旅行のために特別に造られた 4 隻のガレー船はそれぞれ「トヴェーリ」「ヴォルガ」「ヤロスラヴリ」「カザン」と名付けられ、女帝は「トヴェーリ」に乗船した。この行幸には外国の大使も複数参加し、彼らはコストロマまで随行した。

同年 6 月 5 日にシンビルスクに到着するまで、船団はトヴェーリ、カザンを含む大小の町や村に停泊し、様々な民族からなる住民によって歓待された。その後一行はシンビルスクから陸路でモスクワを目指し、6 月16日に帰還した。そのわずか 1 カ月余り後に、女帝はモスクワで諸民族の代表を含めた「立法委員会」を招集することになる。

当然のことながら、帝位について間もない女帝にとって、この旅行は前年に首都で催した騎馬競技などと同様に政治的な意味を持っていた。[19] 支配領域に対する権威の確立、再確認を意図した君主の行幸はカール大帝に遡る伝統であり、エカテリーナはこれに倣うことで、対外的にはロシアがヨーロッパの政治文化を共有することを示し、国内においてはヴォルガ沿岸という多民族的な地域に帝権の支配が及んでいることを象徴的に示した。

さらに、女帝がこれらの地域で出会った住民の中には後に「立法委員会」に代表を送ることになる民族も含まれており、ヴォルガ行幸も立法委員会と同じく、女帝が自らの改革を支える基盤となる社会層を民族の枠を超えて拡大する試みの一部であったと考えることができる。[20] ヨーロッパの空間認識においてヴォルガは欧亜の境界と見なされることがあり、女帝もヴォルテールへの手紙の中でカザンやヴォルガ沿岸地域をしばしば「アジア」と呼ん

---

17 *Осповат А.Л.*Словарь основных имен и понятий // Сумароков. Оды торжественныя. С.268.

18 女帝のヴォルガ行幸に関する記述は、特に断りがない限り以下に依拠している。*Ибнеева Г.В.* Путешествие Екатерины по Волге в 1767 году: узнавание империи // *Артемьева Т.В., Микешин М.И.* (отв. ред.) Философский век. Альманах. Вып. 16. Европейская идентичность и российская ментальность. СПб., 2001. С. 85-102.

19 この騎馬競技については拙稿「エカテリーナの『壮麗なる騎馬競技』とペトロフの頌詩：近代ロシア国家像の視覚化に向けた1766年の二つの試み」『スラヴ研究』第54号、2007年、33－63頁を参照。

20 *Ибнеева* Путешествие Екатерины по Волге. С. 88-89.

でいた。[21] ロシア帝国の多様性、多民族性を認識する上でも、この行幸は絶好の機会であったと考えられる。

一方、文学的形象としてのヴォルガ像も、この川が女帝の行幸によって特別な川となったことに呼応して、ロシア国家のイメージとの結び付きをさらに強めていく。その際ヴォルガが、それまで川全般が担っていた「ロシア帝国の偉大さの称揚」という機能を単独で担う特権的な川となっていった点が注目される。また、上述のようにヴォルガ行幸や立法委員会で帝国内の異民族に関心が向けられたことに合わせるかのように、文学におけるヴォルガ表象でも帝国の多民族性への連想が顔を出すようになっていく。

そのようなヴォルガ表象の例として、カザンに生まれ、幼少時をこの町で過ごした詩人デルジャーヴィンの初期作品『女帝のカザン行幸に寄せて』（1767）を挙げることができる。1762年より軍隊勤務であった詩人は、エカテリーナがカザンを訪れたこの時期、休暇を願い出てちょうどこの町に滞在していた。[22] 以下に全文を引用する。

Пристойно, Волга, ты свирепо протекала,
Как для побед Татар тобой царь Грозный шел;
Ты шумом вод своих весь полдень устрашала,
Как гром тобою Петр на гордых Персов вел;
Но днесь тебе тещи пристойно с тишиною:
Екатерина мир приносит всем собою. [23]

タタールを討つべく雷帝がお前を下った時
ヴォルガよ、お前は相応にも猛烈に流れていた
ピョートルがお前を辿り驕れるペルシア人に雷を差し向けた時
お前の水音は南方全体を戦かせていた
しかし今日はお前も静かに流れるのが相応な時
エカテリーナが皆に平和をもたらしているのだから

イビネーエワによれば、数ある訪問地の中でも女帝が特に重視したのはカザンであった。この頃中央アジアなど東方との通商において大きな役割を果たしていたタタール人の地を訪れることへの関心もさることながら、同時にかつてのイワン四世の行程を反復しつつ、イワン四世とは対照的に武力ではなく個人的な魅力と啓蒙主義の人道的な理念の普及によってカザンを攻略する君主として自らを印象付ける意図があったと考えられる。[24]

女帝のカザン到着に寄せて書かれたデルジャーヴィンのこの詩では、「平和をもたらす」エカテリーナと、二人の好戦的な過去の君主、イワン四世とピョートル一世が対置されてお

21 Larry, Wolff. *Inventing Eastern Europe. The Map of Civilization on the Mind of the Enlightenment.* Stanford, Stanford UP., 1994. P. 152, 210.
22 *Грот Я.* Жизнь Державина. М., 1997. С. 55.
23 «На шествие императрицы в Казань». *Державин Г.Р.* Сочинения Державина с объяснительными примечаниями Я. Грота. Изд. 2-е (без рисунков) в 7 т. СПб., 1870. Т. 3. С. 183.
24 *Ибнеева* Путешествие Екатерины по Волге. С. 89.

り、イワンがカザン遠征、ピョートルがペルシア遠征でともにヴォルガを下り、戦場へ向かったことが想起される。ここでヴォルガは、エカテリーナのカザン行幸という国家的行事に加え、カザン遠征やペルシア遠征といったロシア国家にとって決定的な意義を持った歴史的局面において重要な役割を果たした川として表象されることで、数あるロシア帝国内の川の中でも特権的な地位を与えられている。

さらに、ヴォルガがイワン四世のカザン遠征の際に「猛烈に」流れたことと、現在のエカテリーナの行幸に際して「静かに流れる」ことに、いずれも「相応にпристойно」という語が添えられており、ロシア国家の歴史とヴォルガの水流の間に相関関係が想定されている。ここでは女帝が訪れた特別な川としてのヴォルガの特権性とともに、国家に対するヴォルガの従属的な関係も示唆されている。

ヴォルガ河畔のヤロスラヴリに領地を有していた詩人ワシーリー・マイコフ（1730-78）は、この時期のヴォルガ表象という観点から興味深い二つの詩を残している。ヴォルガ周航に 4 年先立つ1763年、女帝のヤロスラヴリ訪問に寄せて書かれた『1763年、女帝陛下のモスクワからヤロスラヴリへの御到着に寄せた頌詩』はその一つであり、そこでは近くに女帝の姿を認めたヴォルガの反応が次のように描き出されている。

Свой Волга бег остановляет	ヴォルガはその流れをとどめ
И хочет обратиться вверх,	上へ向けて遡りたいと欲するものの
Но по естественному чину	自然界の法則に従って
Бежит в Каспийскую пучину	カスピ海の底へと流れ落ちて行き
И, негодуя, вопиет:	憤怒のうちにこう訴える
«Почто мне не дано судьбою	「どうして私は、この流れを抑えて
Свой бег сдержать и быть с тобою,	あなたのもとに留まれない定めなのでしょう、
Монархиня, российский свет?» [25]	君主よ、ロシアの光よ？」

一方、次の詩は女帝のヴォルガ行幸を踏まえて書かれた『1767年 6 月14日、女帝陛下のカザンから帝都モスクワへの帰還に寄せた詩』の一節である。ここでも同じく女帝の姿を拝したヴォルガの反応が描き出されている。

Я зрю перед собой прекрасные луга;
Там вижу грады я, как кедры возвышенны,
Обременяющи крутые берега,
В которых Волга льясь, в восторге удивилась,
Увидя по себе Екатеринин ход,
Стремление свое сдержав, остановилась
И тем умножила быстротекущих вод,
Которыми покрыв каменья все и мели,

25 «Ода на прибытие Ее Величества из Москвы в Ярославль 1763 года». *Майков В.И.* Избранные произведения. М.; Л., 1966. С. 195.

Творя владычице своей свободный путь. [26]

私は麗しき草原を目前に見る
そこで私が目にする町々は聳え立つ杉林のように
険しい岸にのしかかっている
その岸の間を縫って流れるヴォルガは
己の上を進むエカテリーナを見て歓喜にとらわれ
その奔流を抑え、押しとどめた
そして疾く流れる水の嵩を増し
岩や浅瀬をみなそれで覆い
己の君主のために安らかな道を創り上げた

この二作品は、女帝と自然律、ヴォルガの権力関係という点で鮮やかな対照を成している。1763年の頌詩において、ヤロスラヴリで女帝の姿を認めたヴォルガは、敬愛の念から「流れを抑えて」彼女の下に留まることを欲しつつ、「自然界の法則に従って／カスピ海の底へと流れ落ちて」行く。それに対し1767年の詩では、ヴォルガは女帝の姿を拝するや「驚いて」「その奔流を抑え、押しとどめた」とされ、水流が自然の法則に逆らいつつ女帝の航行を助けている。

即ち、前者においてはヴォルガに対し女帝より自然律の支配力が勝っており、後者では女帝が自然と一体化したヴォルガに対して支配力を及ぼしている。ラトニコフが述べるように「ロモノーソフにおいては『訝しげな』ネヴァによって体現されていた自然の力に対する君主権力の勝利という理念が、マイコフにおいては驚くヴォルガのイメージによって再生産された」。[27] このように、女帝のヴォルガ行幸の前後で、女帝と自然律との間の権力関係が逆転し、ヴォルガは女帝に象徴された帝権に制御される対象となる。

さらに1767年の詩では、以下のようにロシア帝国の対外進出の可能性が示唆される。

Индию съединят с Российскою страною
И Хину во твое подданство приведут —
Не будет защищен пространною стеною
Продерзостный манжур, что гордостью надут. [28]

（女帝に恭順する者たちは）インドをロシアに併合し
中国をあなたの支配下に導いていく
大胆不敵で高慢な満州人も

26 «Стихи на возвратное прибытие Ее Величества из Казани в престольный град Москву июня 14 дня 1767 года». *Майков* Избранные произведения. С. 293-294.

27 *Ратников.* Русские реки: поэзия и политика. С. 59. 「『訝しげな』ネヴァ」は先に引用した『1747年、女帝エリザヴェータ即位の日の頌詩』に現れる表現で、サンクト・ペテルブルクの町の突然の完成という事態をネヴァが得心できないでいる様子を示している。

28 *Майков* Избранные произведения. С. 293.

もはや長大な城壁に守られてはいまい

これら支配の対象としての「インド」「中国」「満州人」の形象は女帝の権力の大きさを示す記号として用いられており、この意味において同作品に現れたヴォルガと同じ機能を担っている。即ち、強大な帝権の支配下に置かれるべき対象として、ヴォルガとロシア国外の異民族が並置されているのである。

先に述べたように、女帝はヴォルガ行幸及びカザン訪問において、イワン四世のカザン遠征がロシア史上の重要事件として想起されるきっかけを意図的に作り出した。デルジャーヴィンの詩が端的に示すように、文学におけるヴォルガ表象もこれに呼応して、ロシア国家の歩みと有機的に結びついた重要な川としてのイメージ、異民族的な連想を伴う川としてのイメージ、そして異民族と同じくロシア国家に従属する川としてのイメージを内包していくことになる。本稿では詳しく検討する余裕がないが、カザン遠征を主題とするヘラースコフ『ロシアーダ』（1771-79）でも、ヴォルガの名がこの歴史的事件の目撃者のごとくたびたび現れることを付け加えておきたい。

3. ヴォルガと帝国の一体化：1790 年代

3.1 世紀末のヴォルガ表象

1770年代後半から80年代の文学作品でヴォルガへの言及が現れるものとしては、1776年に書かれたムラヴィヨフの書簡詩『雄大なるヴォルガの岸辺より君に手紙を書く、親愛なる友よ』を挙げることができる。とはいえ、この作品ではヴォルガという川そのものに直接的な関心は注がれない。冒頭に現れる表現「雄大なるヴォルガの岸辺」も、当時詩人が休暇で滞在していたトヴェーリを指すものの、首都から離れた土地という以外の地域性を連想させる要素はこの詩を通じて現れない。[29]

1790年代になると、詩をはじめとする様々な文学作品、言説においてヴォルガ表象が頻出するようになる。例えば1793年、科学アカデミーが発行する雑誌『新月刊創作』に『ヴォルガへの詩。この河岸に住むあるロシア人による』という詩が発表された。以下のようにこれはヴォルガの水運がロシア国家にもたらす経済的利益を主題とするものである。

Се, тихия струи обильных Волгских вод!
Единство, цепь морей, пространный водный ход!
Россиянин, земель и многих вод владетель,
Где столько излиял тебе щедрот Содетель,
Елико в сих водах явить благоволил
Явил источник в них Российского богатства;
Градам и жителям обширна государства
Открыл путь к промыслам и к выгодным торгам. [30]

29 *Муравьев М.Н.* Стихотворения. Л., 1967. С. 149.
30 Стихи к Волге одного Россиянина, живущего на берегах сея реки // Новыя ежемесячныя сочинения.

粛々と流れるヴォルガの豊かな水よ！
海を繋ぐ鎖、広漠たる水の歩みよ！
数多の陸と水の支配者たるロシア人よ、
創造主はこの川でお示しになったほどの恩寵を
どこでお前に施されただろうか
主はこの川にロシアの富の源を示されたのだ
広大な国家の中の数々の町と住人のために
漁業と活況を呈する商業への道を開かれた

この詩では、国家や神といった巨視的なイメージに、諸産業と結び付いたヴォルガの具体的なイメージが連結されている。このように川の即物的な側面を視野に入れたヴォルガ表象は、これまで検討してきた作品には見られなかったものである。

また1795-96年には、雑誌『快く有益な暇つぶし』に『ヴォルガに』と題された短文が二回に分けて発表された。[31] いずれもある娘が恋人と別れたことを嘆き、ヴォルガに心の苦しさを切々と訴えるという内容のセンチメンタリズム的な詠嘆である。ウグリチで1795年に書かれたと記されており、最初の記事の冒頭には「ある高貴な娘によって書かれた」との注があるが、実際にはこれはシビルスキー公爵という人物が女性を装って執筆したものであった。

愛しいヴォルガ！…私の心の愛しい川！あなたの白銀の流れの傍らで私はまだ長いこと嘆かなければならないの？まだ長いことあなたにただ一つだけの喜びを乞い続けなければならないの？あなたの険しい岸辺で幾夜も私と一緒に座り続けた、私の心の友であるあの方をあなたが返してくれて、私の魂に喜びを与えてくれることを？〈中略〉愛しいけどつれない川！ただあなただけが私の魂の王様の優しいため息や熱い断言の証人だった！[32]

ここではヴォルガが個人的で親密な感情の受け皿となっている。同時にヴォルガは、恋人を乗せた船を運び去ってしまったものとしても言及されており、ロシア国内の移動の手段として意識されているといえる。

1792年に発表されたカラムジンの小説『貴族の娘ナターリア Наталья, боярская дочь 』に現れるヴォルガの描写も興味深い。16世紀のロシアを舞台とするこの小説では、主人公の一人である青年アレクセイの父親が、宮廷内の陰謀に巻き込まれて謀反の疑いをかけられ、おそらくカザン周辺と思われる土地に身を潜める。そのヴォルガ沿岸でのアレクセイの生活模様に関して以下のような記述がある。

ロシアの内部で我々に危険はなかった。我々は、スヴィヤガ川が偉大なるヴォルガに注ぎこみ、偽預言者ムハンマドを崇拝する無数の民、迷信深いが巡礼者を歓待する民が住むかの遠

LXXIX (1793) C. 83.

31 К Волге // Приятное и полезное препровождение времени. VI(1795). C. 289-290; IX(1796). C. 158-160.

32 К Волге. VI. C. 289.

い地の方へ向って行った。我々は彼らに友好的に迎えられ、何の不足もなく10年ばかり彼らとともに暮らしたが、絶えず祖国を思い嘆いていた。ヴォルガの高い岸に座り、ロシアの方々の国から押し寄せてくるその波を見ながら、熱い涙を流した。西から飛んでくる鳥が皆、我々には愛おしく思われた。[33]

ここでヴォルガは沿岸地域のイスラーム文化と関係づけられると同時に、その地を「祖国」モスクワと結ぶものともされている。ロシア帝国に支配される異民族への連想、ロシアの肯定的なイメージとの結び付きといった点は、先に見たマイコフ等のヴォルガ表象とも共通する。

とはいえ、このヴォルガはもはや帝権の支配を一方的に受ける客体ではない。まずここでは、西から飛んで来る鳥と並び、ロシア各地から押し寄せるヴォルガの波がアレクセイ等に望郷の念を抱かせている。即ち、ここでヴォルガはロシア国家による支配の対象ではなく、祖国愛の延長線上にある対象として認識されている。さらに、ここではムスリムが「偽預言者ムハンマド」を崇拝する「迷信深い」人々とされつつも、客人に対して友好的な民として描かれている。1760年代のロシア詩と同様に、ここでもヴォルガは異民族と結び付けられているが、一方で彼ら異民族に対する眼差しには肯定的な要素が加わっている。こうした点は、ヴォルガの形象を先の時代と質的に異なったものにしている。

3.2「女王」としてのヴォルガ

1790年代には、ロシア文学の中のヴォルガ表象の系譜において重要な位置を占める二つの詩が書かれた。カラムジンの『ヴォルガ』（1793）、そしてドミートリエフの『ヴォルガに』（1794）である。

1766年にシンビルスク近郊に生まれたカラムジンも、1760年にシズラニ近郊に生まれカザンやシンビルスクの寄宿学校に学んだドミートリエフも、幼少時より直接ヴォルガに慣れ親しんでいた。彼らのヴォルガ表象は自らのそうした自伝的要素と関連付けられているという点で、それまでのものとは大きく異なっている。

また、同時代への影響力という点でもこの二作品は突出していた。例えば、センチメンタリズム期の作家シャリコフ（1767?-1853）は、旅行記『小ロシアへの旅』（1803）の中の一章「ドニエプル」の冒頭で、大河を前にした感慨を「もし私にK*やД*（カラムジンやドミートリエフ：筆者注）のような才能があれば、彼らが歌でヴォルガを称えたようにドニエプルを称えただろう」と表現した。[34] また後述するように詩人フョードル・グリンカは、1810年よりトヴェーリ県等を旅行してその記録を残したが、ヴォルガを船で航行した体験を記した個所では「ヴォルガを最大限の壮大さで目にしたいと思い、我々は最良の二人の歌人たるИ.И.Д. と Н.М.К. がこの川に向けて書いた詩を読み始めた」と述べ、ドミートリエフ『ヴォルガに』の一部を引用している。[35] これらの記述は、カラムジンとドミートリエフのヴォルガ表象の同時代人への浸透を物語るものと言える。

1793年にはフランス革命に伴う検閲の強化やモスクワのフリーメイソンへの弾圧、ノヴィ

33 *Карамзин Н.М.* Избранные сочинения. Т.1. М., Л. 1964. С. 646.
34 *Шаликов К.П.* Путешествие в Малороссию. М., 1803. С. 104.
35 *Глинка Ф.* Письма к другу. М., 1990. С. 79. なおИ.И.ДとН.М.Кはそれぞれドミートリエフとカラムジンの頭文字である。

コフの逮捕、さらに 3 月には親友のペトロフの死を体験し、6 月から11月まではオリョール県ズナーメンスコエ村の旧知のプレシチェーエフ家で過ごしたカラムジンが、どのような経緯でヴォルガについての詩を執筆したのかは、筆者の知る限りはっきりとは分かっていない。[36] ただ、93年12月 1 日から1794年 4 月18日の間に書かれたと見られるドミートリエフ宛て書簡の中で、カラムジンは友人をシンビルスクに誘い、自らの詩『ヴォルガ』より「そこで私は初めて眼を開き」以下10行を引用している。[37]

この詩は全部で108行から成る。冒頭でヴォルガは「この世で最も神聖な川」と称えられる。「女王」「母」といった形容がなされていることにも注目したい。またここでは、ヴォルガという偉大な対象を描くには詩人自らの才能が乏しいこと（「貧弱な竪琴」）も述べられている。

Река священнейшая в мире,	この世でもっとも神聖な川
Кристальных вод царица, мать!	透明な水の女王、母よ！
Дерзну ли я на слабой лире	この私が貧弱な竪琴で
Тебя, о Волга! величать,	ヴォルガよ、汝を称えることができようか、
Богиней песни вдохновенный,	歌の女神に霊感を与えられ、
Твоею славой удивленный? [38]	汝の栄光に目を瞠らされて？

その後、ヴォルガ沿岸の現在と過去が対照的に想起される。今でこそ「数々の町や村が栄え、波打つ草原が輝いている」ものの、かつてこの地域の「深い森の闇」では「ただ獣の恐ろしい吠え声だけが鳴り響き、耳に優しい人の声が木霊を響かせることはかつてなかった」。さらにこれに続けて、異民族、モンゴルによる支配の歴史が極めて暗い色調で描き出されている。

Брегов, где прежде обитали	その岸辺にかつて住んでいたのは
Орды Златыя племена;	キプチャク・ハン国の様々な種族
Где стрелы в воздухе свистали	そこでは空中を矢が風を切って飛び
И где неверных знамена	そこでは異教徒たちの旗が
Нередко кровью обагрялись	敬虔だが力弱きキリスト教徒の血で
Святых, но слабых християн;	しばしば赤く染められた。
Где враны трупами питались	そこでは烏どもが貪り食った
Несчастных древних россиян;	哀れな古のロシア人の亡骸を

そのヴォルガ沿岸も現在は平和を享受しており、そこでは「諸民族」が「唯一の女神（女帝エカテリーナ）を敬っている」とされる。

---

36 特にズナーメンスコエで過ごした時期をロートマンはカラムジンの伝記上「信頼に足ることは何も明らかでない」時期としている。*Лотман Ю.М.* Сотворение Карамзина. М., 1987. С. 243.

37 Письма Н.М.Карамзина к И.И.Дмитриеву. Сост.Я.К.Грот и Н.Н.Пекарский. СПб., 1866. С. 44-45.

38 *Карамзин Н.М.* Полное собрание стихотворений. М., 1966. С. 118-120. 以下の引用はこの版による。

Но где теперь одной державы	だが今そこではただひとつの国家の
Народы в тишине живут	諸民族が平穏に暮らし
И все одну богиню чтут,	皆が唯一の女神を敬っている
Богиню счастия и славы,	幸福と栄光の女神を
Где в первый раз открыл я взор,	そこで私は初めて眼を開き
Небесным светом озарился	天の光を浴びて
И чувством жизни насладился;	生の感覚を味わったのだ

1803年の版では、「幸福と栄光の女神」という個所に「エカテリーナの治世に書かれた」と注が施されており、カラムジンが作品の歴史的文脈を重視していたことをうかがわせる。またここでは「帝権による諸民族の支配」と「作者カラムジンの誕生」という二つの主題が場所を示す同じ先行詞 где （～の所では）を受けており、ヴォルガをめぐる国家的視点と個人史的視点が並置させられている。さらにこの部分に続き、上述のようにシンビルスク近郊に生まれた詩人がヴォルガ河畔で送った幼年時代が回想される。

作品後半で多くの比重を占めるのが、詩人が子供時代にヴォルガを船で下った際、急流に呑まれて九死に一生を得た体験の回想である。ここでは「死」の臨界点に限りなく近づいた恐怖の体験が、危険を免れることで事後的に「歓喜 восторг 」として昇華される。こうした意識の描写には、18世紀から19世紀初頭のヨーロッパを席巻した崇高美学の一変奏を見出すことができる。[39]

Едва и сам я в летах нежных,	かく言う私もいたいけな頃に
Во цвете радостной весны,	喜ばしき春爛漫の頃に
Не кончил дней в водах мятежных	お前の深みの荒れ狂う水の中で
Твоей, о Волга! глубины.	あたら命を散らしかけたことがある、ヴォルガよ！
Уже без ветрил, без кормила	既に帆もなく舵もなく
По безднам буря нас носила;	我々は嵐によって深淵へと運ばれて行った
Гребец от страха цепенел;	漕ぎ手は恐怖ですくんでしまい
Уже зияла хлябь под нами	我々の下では奈落がもう
Своими пенными устами;	泡立つ口をあけている
Надежды луч в душах бледнел;	心の希望の光は青ざめた
Уже я с жизнию прощался,	私はもう人生と、その美しい朝焼けと
С ее прекрасною зарей;	別れの挨拶を交わした

39 この時代の崇高論の代表的な著作、エドマンド・バークの『崇高と美に関する我々の観念の起源の哲学的研究』（1757）には次のような記述がある。「危険や苦が余りにも身近に差し迫るとき、それらはいかなる喜びをも与えることはできない。そして、ただ恐ろしいということだけである。ところが、ある程度距たると、また、ある程度緩和されると、それらは、我々が日常経験するように、喜ばしいものとなりうる。いや、そうなるのである」。エドマンド・バーク（中野好之訳）『崇高と美の観念の起源』みすず書房、1999年、60‐61頁。カラムジンの著作にバークの崇高論との連関を見る研究としては以下のものがある。Bilenkin Vladimir “The Sublime Moment: Velichestvennoe in N.M.Karamzin’s Letters of a Russian Traveler,” *Slavic and East European Journal*. 42, no. 4 (1998), pp. 605-620.

В тоске слезами обливался	憂いのあまり涙にくれ
И ждал погибели своей...	我が終わりの時を待っていた…
Но вдруг творец изрек *спасенье* —	しかし突然神が「救済」を告げた
Утихло бурное волненье,	荒れ狂う嵐は収まった
И брег с улыбкой нам предстал.	そしてほほ笑む岸が我らの前に現れた
Какой восторг! какая радость!	何という歓喜！何という喜び！
Я землю страстно лобызал	私は夢中で大地に接吻し
И чувствовал всю жизни сладость.	生の甘みを余すところなく味わった。
Сколь ты в величии своем,	おおヴォルガよ、怒れるときに
О Волга! яростна, ужасна,	猛くあり、恐ろしくあればあるほどに
Столь в благости мила, прекрасна:	慈しみのときには、優しく美しい
Ты образ божий в мире сем!	汝こそまさに地上における神の似姿だ！

終結部には以下の連が独立して置かれている。上述のスマローコフと同じく、ここではヴォルガが悠久の時間という概念への連想を導いている。

Теки, Россию украшая;	流れよ、ロシアを飾りつつ
Шуми, священная река,	ざわめけ、聖なる川よ
Свою великость прославляя,	自らの偉大さを称えつつ
Доколе времени рука	時間の手によって
Не истощит твоей пучины...	お前の深みが枯れる日まで
Увы! сей горестной судьбины	ああ、この悲しき定めからは
И ты не можешь избежать:	お前も逃れることができない
И ты должна свой век скончать!	汝もまたいつか生を終えねばならぬ！
Но прежде многие народы	しかしその前にあまたの国民が
Истлеют, превратятся в прах,	滅びては灰燼に帰し
И блеск цветущия Природы	花咲く自然の輝きも
Померкнет на твоих брегах.	汝の岸で色あせることだろう。

この作品のヴォルガ下りの個所では、主にカスピ海近辺に生息するチョウザメ（осетр）への言及が現れる。こうした点を念頭に置いてか、クロスはこの作品を「地方色の表れた細部と回りくどい『勢いをそぐ要素』の並置」という点で「おそらく最もトムソンの手法に近い」とする。[40]

ペトロフはカラムジンのこの詩を、様式的に特定のジャンルに合致するものではないものの文体及び主題は称賛頌詩に範を取ったものとし、ロモノーソフのその種の作品を引き継ぐ

40 A. G. Cross *N.M. Karamzin. A Study of his Literary Career 1783-1803.* Southern Illinois University Press. 1971. p.191. 英国の詩人トムソンの『四季』（1730-46）は18世紀ヨーロッパ文学の自然描写に大きな影響を与えたことで知られる。カラムジンとの関連については藤沼貴『近代ロシア文学の原点：ニコライ・カラムジン研究』れんが書房新社、1997年、199-215頁を参照。

修辞として、「女王、母」への呼びかけ、自分の詩才の卑下、霊感の源泉としての詩神ミューズといった点を挙げている。[41] 確かにこの詩は君主や国家を直接称えるものではなく、自由な連構成も各連10行を標準とするロモノーソフの規範的な頌詩とは異なるが、そうした点は称賛頌詩の伝統に連なるものといえる。クロスが指摘する「回りくどさ」ともこれらの因習的要素を念頭に置いたものであろう。

さらにペトロフは、頌詩との連続性や、注で女帝の名への直接の言及が現れることなどを念頭に置きつつ、この詩では「『透明な水の女王、母』が国家やその代表者の位置を占めている」[42] としている。ペトロフはこのアナロジーをそれ以上問題にしていないが、詩の冒頭でヴォルガが「女王」「母」と呼ばれる点は、実際のところ極めて示唆に富む。注での言及に加え、本文中にも女帝を示す表現が現れるなど、この作品には総じて女帝の存在が影を落としており、「女王」「母」といった表現も単にヴォルガの壮麗さを隠喩的に示すのではなく、直接ヴォルガと女帝のイメージを重ね合わせる機能を担うことになる。即ちこの詩では、頌詩において君主に向けられる眼差しがそのままヴォルガに向けられることになるのである。

ヴォルガへのもう一つの呼称「母」が、上述したように18世紀の頌詩において女帝への呼びかけに用いられた表現であり、エカテリーナ二世に対して頻繁に用いられたことも、この対応関係を裏付けている。特にエカテリーナ二世については統治の初期からこの呼称が確立しており、1767年の立法委員会の開会に先立って代議員達が女帝に「エカテリーナ大帝、祖国の至賢なる母」という称号を贈るよう提案したことはよく知られている。[43]

ヴォルガと女帝の照応は、終結部の直前に現れる表現「地上における神の似姿」にも見ることができる。神と皇帝のアナロジーという、ビザンツ由来の伝統とメタファーを頻用するバロック文化の双方の影響下で培われたレトリックは、18世紀半ばのロモノーソフ等の荘厳頌詩においてもしばしば用いられた。[44] この詩では、ヴォルガが神の似姿とされることで、荘厳頌詩における君主の機能を担うことになる。

また、冒頭や最終連で川に冠せられる形容詞「聖なる」も、頌詩で君主に対して頻繁に用いられたものである。さらに、ヴォルガが「永遠」と「あまたの国民や自然」の間の両義的な存在として認識されていることは、君主が天上の「朽ちない王＝神」と対比されて「朽ちる王 тленный Бог 」と呼ばれ、地上の存在でありながら最大限の神性を付与される両義的な存在として認識されていたことと符合している。[45]

デルジャーヴィンやマイコフの詩におけるヴォルガは、ロシアの君主を助ける存在か、ロシアの君主、帝権によって制御されるべき客体であったが、カラムジンはヴォルガを国家の象徴である女帝のイメージと重ね合わせた。こうして、彼は頌詩が君主に与えてきたオーラ、崇高さをヴォルガに転化し、ヴォルガをロシアの君主および国家と二重写しにしつつ表象したのである。

---

41 *Петров.* «Волжский хронотоп» . С. 31, 33.

42 *Петров.* «Волжский хронотоп» . С. 33.

43 Richard S. Wortman, *Scenarios of Power. Myth and Ceremony in Russian Monarchy.* Vol. 1. Princeton: Princeton University Press, 1995, p.114, 121, 127-128: *Основат.* Словарь основных имен и понятий. С.268.

44 拙稿「ロモノーソフにおける崇高：『聖化』の修辞学」『18世紀論集』第2号、13頁。

45 拙稿「ロモノーソフにおける崇高」、12頁。

3.3「帝国」としてのヴォルガ

ドミートリエフの詩『ヴォルガにK Волге』[46] は、カラムジンの『ヴォルガ』の翌年、1794年に書かれている。友人にして文通相手同士であった二人の詩人は、ヴォルガを主題とする互いの作品を知っていた。まず先述のように、カラムジンはドミートリエフ宛ての書簡の中で自らの『ヴォルガ』を引用している。また1794年9月6日の書簡で、カラムジンはドミートリエフから送られた『ヴォルガに』を称賛し、その上で第3連冒頭4行の不自然さを指摘していくつかの語句を入れ替えた代案を示している。[47] 従って、ドミートリエフの『ヴォルガに』が、カラムジンの先行作品を踏まえていることは推測するまでもない。

『ヴォルガに』の軸となっているのは、詩人の最近のヴォルガ航行の経験である。回想記『わが生涯への眼差し』によれば、1794年の初夏、故郷のシズラニに滞在していたドミートリエフは、ツァリーツィン郊外に住む伯父を訪ねてヴォルガを下る旅に出た。この時に船室の中で詩『ヴォルガに』が書かれたと彼は述べている。[48]

このように個人的な体験を軸とする一方、ヴォルガが「女王 царица 」と呼ばれて称賛されている点、ヴォルガ河畔で生まれ育った詩人が自らの幼年時代を回想している点など、この詩は多くの点でカラムジンを踏襲している。また、一連辺り10行、4脚ヤンブという形式は、カラムジン以上にこの詩をロモノーソフの規範的な荘厳頌詩に近いものとする。

Конец благополучну бегу!	首尾よい航海にも終わりがやってきた！
Спускайте, други, паруса!	友よ、帆を下ろしてくれ！
А ты, принесшая ко брегу,	そしてお前、我々を岸に運んでいく
О Волга! рек, озер краса,	おおヴォルガよ!川たちと湖たちの華、
Глава, царица, честь и слава,	頭、女王、栄誉にして栄光、
О Волга пышна, величава!	おお華麗にして崇高なるヴォルガよ！
Прости!.. Но прежде удостой	さらばだ！しかしまずは注意を傾けてくれ、
Склонить свое вниманье к лире	世に知られてはいないが
Певца, незнаемого в мире,	お前に育まれた
Но воспоенного тобой!	歌い手の竪琴の音に！
Исполнены мои обеты;	私の誓いは果たされた
Свершилось то, чего желал	私がまだいたいけな頃
Еще в младенческие леты,	願っていたことが実現した
Когда я руки простирал	そのころ私は父の茅屋から
К тебе из отческия кущи,	お前に向かって手を伸ばし、

46 *Дмитриев И.И.* Полное собрание стихотворений. М., 1967. С. 87-89. 以下の引用はこの版による。なお、ゴンチャロフの『断崖』（1869）第二部第二章には、主人公ライスキーがヴォルガ対岸の山々を見ながらこの詩の一節を口ずさむ個所がある。

47 Письма Н.М.Карамзина к И.И.Дмитриеву. С. 51. なお、本稿で用いる1967年版のテクストは1795年刊の作品集に依るものだが、既にカラムジンの指摘を全て取り入れている。

48 *Дмитриев, И.И.* Взгляд на мою жизнь, Записки действительнаго тайнаго советника Ивана Ивановича Дмитриева. М., 1866. С. 70-72.

Взирая на суда, бегущи	白い帆をかけて早駆けていく
На быстрых белых парусах!	いくつもの船を見ていたのだ！
Свершилось, и блажу судьбину:	願いが叶い、私は運命を祝福する
Великолепну зрел картину!	私は壮麗な光景を目にした！
И я был на твоих волнах!	そして私はお前の波の上の人となった!

時に微風に吹かれ、時に嵐や波音に耳を聾されながら、町や村、荒地や断崖の間を詩人の乗った船は進んでいく。途中、舵取りが森の向うに見える丘に注意を促し、そこにステンカ・ラージンの陣営があったことを告げたことが詩人の空想を刺激する。彼は「想像力の翼によって過去の時代を飛び」、ヴォルガ沿岸地域と関わりの深いロシア史上の諸事件に思いを馳せる。まずはイワン雷帝のアストラハン遠征がここで想起される。

Летал, и будто сквозь тумана	私は飛んだ、そしてあたかも霧の向こうに
Я видел твой веселый ток	イワン雷帝の軍勢の下に
Под ратью грозна Иоанна;	お前の朗らかな流れを見たようであった
И видел Астрахани рок.	アストラハンの運命も目にした
Вотще ордынцы безотрадны	喜びを知らぬ汗国の者たちは
Бегут на холмы виноградны	葡萄園の丘へと駆け登っては
И сыплют стрелы по судам:	船へ向けて空しく矢を放つ
Бесстрашный росс на брег ступает,	恐れを知らぬロシア人が岸に踏み込むと
И гордо царство упадает	傲慢な王国は打ち震え
трепетом к его стопам.	その足元にひれ伏す

次に想起されるのはピョートル大帝のペルシア遠征（1722-23）である。ここでは来るべき遠征が擬人化されたカスピ海の声を通してペルシア人に向けて予言されている。同時に「南＝月＝オスマン帝国」「北＝獅子＝スウェーデン」を相手とする戦争におけるピョートルのこれまでの勝利が引き合いに出され、そうしたロシアの過去の栄光に連なるものとしてペルシア遠征が位置付けられている。[49] 興味深いのは、この予言とともに突如ヴォルガが水嵩を増し、歓喜のうちにカスピ海を包み込むとされている点である。

Я слышал Каспия седого	私は白髪の老人カスピ海が
Пророческий, громовый глас:	轟く声でこう予言するのを聞いた
«Страшитесь, персы, рока злого!	「ペルシア人たちよ、辛き定めを恐れよ!

49 マコゴーネンコはこの詩に施した注釈で「月と獅子」を「トルコとペルシアの紋章」と解釈しているが、獅子はペルシアではなくスウェーデン王国の紋章であり、また上の「『南』も『北』も」という詩句との整合性や、この時点でペルシア遠征があくまで未来の事件として言及されていることなどからも、「獅子」はスウェーデンと解すのが適当であろう。*Макогоненко. Г.П.* Примечания // *Дмитриев.* Полное собрание стихотворений. С. 424. なお、オスマン帝国に対しロシアは1686-1700年の戦争では勝利したものの、直近のプルート川の戦い(1711)では敗北しているため、ここでは「月を陰らせ」という表現に留められているものと考えられる。

Идет, идет царь сил на вас!	強きツァーリがお前たちを目指し進んで来る！
Его и Юг и Норд трепещет;	その者は「南」も「北」も震え上がらせ
Он тысячьми перуны мещет,	おびただしい雷を次々に放ち
Затмил Луну и Льва сразил!..	月を陰らせ、獅子を打ち倒した！
Внемлите шум: се волжски волны	あの音を聞け、あれはヴォルガの波が
Несут его, гордыни полны!	誇りに満ちてその者を運んで行くのだ！
Увы, Дербент!.. идет царь сил!»	ああ、デルベントよ！強きツァーリが来る！」

Прорек, и хлынули реками	このように予言すると、神の両眼より
У бога воды из очес;	水が川となって流れ出した
Вдруг море вздулося буграми,	海の水が突然嵩を増して盛り上がり
И влажный Каспий в них исчез.	水を湛えたカスピはその中に消えた
О, как ты, Волга, ликовала!	おおヴォルガよ、お前は何と歓んだことか！
С каким восторгом поднимала	どれだけの興奮とともにお前は
Победоносного царя!	勝ち誇ったツァーリを持ち上げたことか！
В сию минуту пред тобою	その瞬間、お前を前にすると
Казались малою рекою	バルト海もカスピ海も、全ての海が
И Бельт и Каспий, все моря!	小さな川のように見えたものだ！

ここではロシアのペルシアに対する勝利の予言に続き、ヴォルガの水がカスピ海を呑み込む描写が現れる。この二つが並置されていることから、ヴォルガをロシア帝国の換喩とするこの詩の意図が明らかとなる。この点を裏付けるのが、上の引用の最後の 3 行である。ここではヴォルガと比較するとバルト海やカスピ海が小さな川のように見えるとされているが、「バルト海」「カスピ海」への言及はそれぞれ、ロシア帝国がスウェーデンとペルシアを攻略したことを示唆するもの考えられる。従って、ここでもヴォルガはロシア帝国そのものと同一視されている。

最終連では、自らの詩才への謙遜というロモノーソフ等の荘厳頌詩に典型的な修辞が現れており、カラムジンの詩と同じく、ヴォルガが荘厳頌詩における君主や国家の位置を占めていることが示されている。さらにヴォルガはガンジスやユーフラテスやナイルにも優る「天の下で一番の川」と称えられる。古代文明の発祥地の川と比較することで、ヴォルガ及びロシアが空間的のみならず時間的にも比類ない存在として表象されている。

Но страннику ль тебя прославить?	だがお前を称え尽くすことが旅人にできようか？
Он токмо в искренних стихах	旅人はただその誠実な詩行の中で
Смиренну дань хотел оставить	幸多きお前の岸の上に
На счастливых твоих брегах.	慎ましい貢物を残して置きたいだけなのだ
О, если б я внушен был Фебом,	おお、もし私がボイポスの霊感を受けていたら
Ты первою б рекой под небом,	お前は天の下で随一の川であり
Знатнейшей Гангеса была!	ガンジスより遥かに高貴な川となろう

Ты б славою своей затмила	お前はその栄光でユーフラテスや
Величие Евфрата, Нила	ナイルの崇高さを色褪せさせて
И всю вселенну протекла.	全宇宙を流れる川となろう

このように、ドミートリエフはヴォルガに対する「女王」という呼びかけの形をカラムジンから引き継いだが、カラムジンがヴォルガを意識的に女帝のイメージに重ねたのに対し、ドミートリエフはヴォルガの「アジア」地域との歴史的な関わりや過去のロシア帝国の領土拡張の歴史への連想を挟み込むことで、ヴォルガをむしろロシア帝国そのものと直接重ね合わせている。いずれにせよ、これらの詩においてヴォルガは国家に従属するものではなく、直接間接にロシア国家そのものと重ねられている。

また、これらの例では、ヴォルガは個別に敬愛の念が寄せられる対象となっている。『貴族の娘ナターリア』でも、ヴォルガは祖国愛と結びついて「熱い涙」を誘う川となっているが、ほぼ同時期に書かれたこれらの詩におけるヴォルガへの称賛も、スマローコフやマイコフなどそれ以前の詩作品には見られないものであった。

さらにもう一点注目しておきたいのは、両詩人の詩に自伝的、個人的要素が組み込まれている点である。先にも述べたように、彼らの詩では、ヴォルガ河畔で「初めて眼を開き天の光を浴びて生の感覚を味わった」（カラムジン）、ヴォルガに「育まれた」（ドミートリエフ）など、詩人が幼少時からヴォルガと個人的な関係を結んでいたことが強調されている。

この点は、デルジャーヴィンの頌詩と比較すると興味深い。ラムによれば、デルジャーヴィンは自らの個人史を詩で主題化した最初の詩人であり、また君主をロモノーソフが行ったように自らと隔絶した客体として描くのではなく、自らの中に内面化され規律を与える存在として描いた。[50] デルジャーヴィンのこうしたアプローチと、カラムジンやドミートリエフの詩でヴォルガと詩人の自伝的記憶とのつながりが前面に出されたこととの間には、並行関係を見ることができる。カラムジンとドミートリエフの描くヴォルガは、国家や君主と重ねられる存在であると同時に、幼少時からの経験を通じて詩人と個人的な関係を結び人格形成に与ってきた存在であった。

このように、カラムジンやドミートリエフのヴォルガ表象は、ロシアやその君主に対する個人のかけがえのない敬愛の感情の受け皿となったという点で、19世紀以降のナショナル・シンボルに近い機能を担わされたものと考えることができる。とはいえ、この時点で念頭に置かれている「ロシア」が、あくまで多文化的な帝国であることは看過すべきでないだろう。

4. ヴォルガの「ロシア性」の純化：1810 年代

4. 1 旅の記録の中のヴォルガ像

ロシア史において決定的な意義を持ったナポレオン戦争の時代は、文学におけるヴォルガ表象にとっても一つの転機となった。ほぼこの時代を境として、ヴォルガのイメージは異民族や多文化性への連想を伴うものから、それらの要素を排除した「ロシアの川」「母なる川」

50 Harsha, Ram. *The Imperial Sublime. A Russian Poetics of Empire.* Madison, The University of Wisconsin Press, 2003. P. 83-88.

といったものへと変化していく。

こうしたイメージの変容には複数の要因が考えられる。周知のように、この時期には対外危機意識の高まりの中、ヨーロッパ各国で新たなナショナル・アイデンティティの形が模索された。ロシアもその例外ではなく、ナショナル・シンボルとしてのヴォルガ像の変容もこの動きと連動したものと推測される。

加えて重要なのが、この時期までに多くのロシア人が直接ヴォルガに接する機会を得、ヴォルガに関する言説、情報が増大したという点である。パーヴェル期からナポレオン戦争期にかけて外国旅行が制限されたために国内旅行に対する関心が高まったこと[51]、調査旅行が多く行われるようになったこと、戦争の際にヤロスラヴリ、ニジニ・ノヴゴロドといったヴォルガ沿岸の都市がモスクワ市民の疎開先となったことなどが、そのような契機を生み出した。

この時代のヴォルガ表象の一例として、まずはナポレオン戦争前後の空気を伝える資料として名高いフョードル・グリンカの『ロシア人将校の手紙』(1808、1815-16) を見てみたい。後にデカブリストとなる著者グリンカは、アウステルリッツの戦いに軍人として参加した後、病気を理由に軍務を退いて専ら学術に携わり、1810-1811年にかけて民衆の風俗、習慣を研究するためにスモレンスク県、トヴェーリ県、モスクワ県、ヴォルガ沿岸地域、キエフ、チェルニーゴフ県を訪れた。その記録は1812年に兄セルゲイの発行する愛国色の強い雑誌『ロシア報知』で発表され、後に『ロシア人将校の手紙』第二巻に収められることになる。

ヴォルガに関する記述が頻繁に現れるのはその中のトヴェーリ県に関する部分であり、著者は実際にヴォルガを船で下ったりもしている。ルジェフを訪れた際の彼のヴォルガとの最初の邂逅は以下のように描き出されている。

> やっと我々の前に「世界の神聖な川 река священная в мире」ヴォルガが現れた〈中略〉。正直に言うが、私は子供のように貪るように川に飛び込み、きらきらした水を手につかみ、喉の渇きを癒しただけでなくヴォルガの水を心行くまで飲みたいという欲求をも満たしたのである。私はドナウ、ドニエストル、ドニエプル、ヴィスワ、ブクの水を飲んだが、ヴォルガの水はこれら全ての水よりも美味しいように思われた。おそらくは想像力が非日常の心地よさでもって味付けをしたのかもしれないが、実際ヴォルガの水は非常に軽く、体に優しかった。[52]

原文では斜体で記された「世界の神聖な川 река священная в мире 」という表現は、カラムジン『ヴォルガ』の第一行目のやや不正確な引用と考えられる。後述するようにカラムジンのこの作品は別の個所でも言及されており、当時の知識人のヴォルガ・イメージに対するこの詩の影響力の大きさを示すものといえる。また、ロシア内外の川と比べたヴォルガの卓越性が、ここでは水を味わうことによって身体感覚を通して具体的に感知されている点も興味深い。

グリンカはヴォルガ沿岸の住民を肌の色の白さによって特徴づけるとともにフォークロ

---

51 Dickinson, Sara. *Breaking Ground: Travel and National Culture in Russia from Peter I to the Era of Pushkin.* Amsterdam-NY, Rodopi, 2006. P. 105.

52 Русский вестник на 1812 год, издаваемый Сергеем Гликою. Ч.20, Кн.12. С. 93-94.

ア起源の表現を引き合いに出しており、この土地と古いロシアの民衆文化とのつながりを印象付けている。

> 顔の色が極めて白いことがヴォルガ沿岸の住民の特徴である。これは健康に良い水か、ヴォルガの切り立った岸で人々が呼吸する軽い空気によるものに違いない、と何度かルジェフに行ったことのある友人が私に言った〈中略〉。まさにここから、「肌の白い белотелый」と言われている民衆が住むロシアの諸地方が始まる。昔は美男について語るとき、「あの人の白い肌と紅い顔といったらミルクに血を垂らしたようだよ！」などといったものである。[53]

加えてヴォルガの対岸は以下のように純粋にロシア的な地として描き出される。

> ヴォルガの向こう岸に行くと、まさに聖なるルーシに身を置くことになる！ここでは純粋なロシア語が話され、純粋にロシア風の衣装がまとわれているのである。[54]

一方、船でヴォルガ下りを始めた著者は、航行三日目の記述の中で以下のようにヴォルガ沿岸の歴史に思いを馳せる。

> 岸辺のあちこちに古い塹壕の廃墟を目にした。かつてタタール人やモルドヴァ人やチェレミス人がこれらの要塞を周りに築いてはロシア人から肥沃なヴォルガ沿岸の領有権を得ようとしたことがあったかもしれない。しかし最終的には「正義」が勝利した。獰猛な種族は塵のごとく追い払われ、川の中の偉大なる女王たるヴォルガ、その広々とした流れは、太陽と同じようにその行程の大部分を今やロシア領内で巡るのである（1）。[55]

上の引用の最後に施された脚注(1)では再びカラムジン『ヴォルガ』より「そこでは異教徒たちの旗が И где неверных знамена 」から「諸民族が平穏に栄える」に至る部分が引用されており（ただし最終行では「暮らす живут 」ではなく「栄える цветут 」という語が用いられている）、ヴォルガ沿岸地域の多文化性が意識されている。とはいえ、塹壕の廃墟への言及や非ロシア諸民族が「塵のごとく追い払われ разсыпались как прах 」という記述は、この地域の多文化性を過去に囲い込んでいる。さらに、ヴォルガ沿岸地域のロシア化を「正義」の勝利と表現することで、非ロシア的要素は払拭されるべきものと位置付けられる。上述のルジェフ近辺の「純粋にロシア的な」ヴォルガ沿岸地域の描写と同様に、この箇所も「ロシアの川」としてのヴォルガ・イメージを強く印象付けるものといえる。

調査旅行とナポレオン戦争期前後のヴォルガ表象の関連を示すもう一つの例として、探検家ニコライ・オゼレツコフスキー（1750-1827）による記録を挙げることができる。それまでロシア各地で多くの調査旅行を行ってきた彼は、1814年にヴォルガの源流周辺とセリゲル湖の調査を行った。このとき彼は、ヴォルガの源流を史上初めて突き止め、旅行の記録を後

53 Русский вестник на 1812 год. Ч.20, Кн.12. С. 95-96.
54 Русский вестник на 1812 год. Ч.20, Кн.12. С. 98.
55 Русский вестник на 1812 год. Ч.20, Кн.12. С. 128-129.

に『セリガル湖への旅』（1817）として出版した。[56]

この書物では沼に覆われたヴォルガ源流をはじめ、訪れた個所の地形や植生などが細かく描写される。全般的に、文学者グリンカの手記と異なり自然科学者の立場からなされたオゼレツコフスキーの記録は客観性を志向したものだが、描写に先立ちヴォルガについて以下のように述べられている。

> ヴォルガはロシアの広大な空間を流れ貫いており、そこに注ぎ込む数多くの川から水を蓄えている。それらの川が流れる遠く離れた土地と、ヴォルガはそれらによって結びつけられている。〈中略〉ヴォルガは何千もの民を養っているが、彼らは歌の中でヴォルガを「母 матушка 」と呼んでいる。この「母」の故郷を私は描いていきたいと思う。[57]

ここではヴォルガに対する「母」という呼称への言及が現れる。先に述べたように、「母」としてのヴォルガのイメージはスマローコフの頌詩に萌芽が見られ、女帝の形象とヴォルガを重ね合わせたカラムジンの詩にも現れているが、オゼレツコフスキーはこれを不特定多数の民衆によるフォークロア起源の表現と位置付けている。ヴォルガの源流という場所が謎でなくなり、源流も含めたヴォルガ全体がロシア人の知覚対象に組み込まれる契機となったこの探検を描く中でヴォルガのこうしたイメージが提示されている点は示唆に富むと言える

これらの旅の記録に現れるヴォルガ像は、多文化的な連想を積極的に伴うものではなく、むしろ民衆文化と親和的なロシアの等質なイメージと結びつけられている。後述するように、ナポレオン戦争前後の時期には詩文学においてもヴォルガ表象は同種の変容を被るが、文学的形象としてのヴォルガ像の変化と地理上のヴォルガの発見という二つの現象が、19世紀初頭にほぼ時期を同じくして生じていることは象徴的である。

4.2 等質化するロシアとヴォルガのイメージ

前項で述べたように、ナポレオン戦争時代にはヤロスラヴリやニジニ・ノヴゴロドといったヴォルガ沿岸の都市がモスクワ市民の疎開先となった。トルストイ『戦争と平和』でロストフ家がヤロスラヴリに疎開するのはこうした状況を念頭に置いた設定であり、ゲルツェン『過去と思索』の冒頭でも彼が生れた年に家族がヤロスラヴリ、次いでトヴェーリ県へ疎開した話が伝えられている。[58] カラムジン、バーチュシコフ、ワシーリー・プーシキンなどモスクワの文化人の多くもニジニ・ノヴゴロドに疎開した。[59] これに伴って首都の文芸サロンも移動し、ヴォルガ体験はそれまでよりはるかに集団的な共通体験になったのである。

ワシーリー・プーシキン『ニジニ・ノヴゴロドの住人たちに』（1812）で念頭に置かれているのはそうしたコンテクストである。ここでは、モスクワから疎開した詩人が「ヴォルガ

---

56 オゼレツコフスキーとその業績に関しては以下を参照。*Есаков В.А., Соловьев А.И.* Русские географические исследования европейской России и Урала в XIX – начале XX в. М., 1964. С. 10-16.

57 *Озерецковский Н.* Путешествие на озеро Селигар. СПб., 1817. С. 79.

58 アレクサンドル・ゲルツェン（金子幸彦、長縄光男訳）『過去と思索1』筑摩書房、1998年、21-23頁。またИстория Ярославля. С древнейших времен до наших дней. М., 1999. С. 228も参照。

59 *Храмцовский Н.* История и описание Нижнего Новгорода. Нижний Новгород. 1998. С. 154.

の岸に養われた者たち」に向けて次のように訴える。

Примите нас под свой покров,	我々をその屋根の下に受け入れてくれ
Питомцы волжских берегов!	ヴォルガの岸に養われた者たちよ！
Примите нас, мы все родные!	我々を受け入れてくれ、我々は皆親族ではないか！
Мы дети матушки Москвы!	我々は母なるモスクワの子供たちではないか！
Веселья, счастья дни златые,	朗らかで幸福な黄金の日々よ、
Как быстрый вихрь, промчались вы!	お前たちは疾風のように駆け抜けて行ってしまった！
Примите нас под свой покров,	我々をその屋根の下に受け入れてくれ
Питомцы волжских берегов!	ヴォルガの岸に養われた者たちよ！
Чад, братий наших кровь дымится,	我々の郎党や兄弟の血は湯気を放ち
И стонет с ужасом земля!	大地は恐怖の中で呻いている!
А враг коварный веселится	一方で狡猾な敵は有頂天だ
На башнях древнего Кремля!	由緒あるクレムリンの塔の上で!
Примите нас под свой покров,	我々をその屋根の下に受け入れてくれ
Питомцы волжских берегов!	ヴォルガの岸に養われた者たちよ！
Святые храмы осквернились,	聖なる御堂は汚され、
Сокровища расхищены!	宝物は略奪された！
Жилища в пепел обратились!	住居は灰と化した！
Скитаться мы принуждены! (60)	我々は放浪を余儀なくされた！

ここで詩人はニジニ・ノヴゴロドの住人に「我々は皆親族ではないか！」と呼びかけている。即ち「由緒あるクレムリン」や「聖なる御堂」に象徴されるモスクワの住民とニジニ・ノヴゴロドの「ヴォルガの岸に養われた者たち」の親密な結びつきがうたわれ、共通の外敵ナポレオンがこれに対置されている。ニジニ・ノヴゴロドはもとより多文化的な連想の強い町ではないが、ヴォルガという語が従来見られたように異文化、異民族への連想を喚起する余地もここには残されていない。

このニジニ・ノヴゴロドという町は、ナポレオン戦争に至るまでの時代に同時代の諸事件と17世紀初頭の動乱時代を重ね合わせる試みが頻繁に行われる中で、アナロジーの材料を提供した。(61) 例えば、1812年にグルジンスキー公爵率いる13連隊からなる義勇軍が編成され

60 «Жителям Нижнего новгорода». Поэты 1790 - 1810-х годов. Л., 1971. С. 673－674.

61 例えば1806-07年のロシア文学におけるこのアナロジーについては以下を参照。*Зорин А.Л.* Кормя двухглавого орла... Литература и государственная идеология в России в последней трети XVIII – первой трети XIX века. М., 2001. С. 157-186.

たニジニ・ノヴゴロドは、動乱時代の終わりにポーランド軍をモスクワから追放する義勇軍が当地出身のミーニンによって創設された土地でもあった。この地に疎開していた文学者たちはたびたびカラムジンの家に集まったが、あるときロシアが直面する災厄の帰結について悲観的な意見が出されると、カラムジンは窓から見えるクレムリンを指さし、ミーニンとポジャルスキーによるモスクワの解放を念頭に置きつつ、ロシア人は1612年と同じように1812年を迎えるだろうと答えたという。[62]

ヴォルガはしばしば動乱時代の舞台として想起された。先のフョードル・グリンカの兄であり雑誌「ロシア報知」の発行人であったセルゲイ・グリンカは、頌詩『ポジャルスキーとミーニン、あるいはロシア人の犠牲』（1807）や戯曲『ミーニン』（1809）といった作品を既に物しており、疎開で各地を遍歴した記録『1812年に関する手記』では「ヴォルガの河畔」ニジニ・ノヴロゴドでミーニンに思いを馳せている。

> ヴォルガの河畔、ミーニンの故郷で「祖国の子」の創刊号を目にして、モスクワからニジニ・ノヴゴロドにやってきた疎開者たち、および放浪を続ける「ロシア報知」の編集者である私が抱いた感情は、とても言葉で表すことはできない。[63]

また以下の個所では、ヴォルガ並びにオカ川を目にしたことが、モンゴル支配の時代と動乱時代という、同時代のナポレオン戦争と並ぶロシア史上の二つの危機の時代を著者に想起させている。

> 旅行馬車に慣れない私は散歩がしたかったというのもあり、ゴルバトフからパヴロヴォへの間をずっと徒歩で移動した。オカ、ヴォルガ、そして過去の出来事が、ロシアがモンゴル人ないしタタール人の長年の軛のもとで呻吟していたあの時代のことを思い出させた。しかし、数々の国を震え上がらせ数々の民を征服したあのキプチャク・ハン国はどうして消えてしまったのか？誰がそれをロシアの大地の上から追い払ったのか？ただロシアの大地のみが、他の力を借りずに行ったのだ。ロシアは1612年にも苦難を味わったが、その時に敵どもを退け、モスクワをモスクワとして守り通したのは誰だったか？ただロシア人のみだ。つまるところ、祖国の力は祖国の中にあるのだ。[64]

モンゴル人が「ロシアの大地の上から追い払」われた、ただロシア人のみが他の力を借りずにモンゴルやポーランドといった敵を退けたといった記述は、先のフョードル・グリンカの手記と同様にヴォルガ沿岸やロシアの多文化性を過去に囲い込むと同時に、ロシアの一枚岩的なイメージを提示している。

ここで「ロシアの大地」「ロシア人 Русские 」といった語が喚起するのは支配者と被支配者の間の断絶が消去され、等質な空間としてイメージされた「ロシア」である。一方、こう

---

62 *Храмцовский.* История и описание Нижнего Новгорода. С. 154.

63 *Глинка С.* Записки о 1812 годе Сергия Глинки, первого ратника московского ополчения. СПб., 1838. С. 272-273.

64 *Глинка С.* Записки о 1812 годе. 192-193.

した身分間の結束というイデオロギーを打ち出すにあたっては貴族ポジャルスキーと平民ミーニンの形象がしばしば用いられたが、彼らの名はヴォルガ河畔のニジニ・ノヴゴロドと深く結びついていた。このことも、外敵と対置させられ等質化したロシアのイメージとヴォルガとの連想を強化したと考えられる。

とはいえ、公平を期すために述べておけば、この時期のロシア詩におけるヴォルガ表象が全面的に「ロシア化」し、アジアや異民族といったイメージを払拭したわけではない。少し上の世代にあたるドミトリー・フヴォストフ（1757-1835）の詩『ネヴァ川。1813年シリッセルブルクにて』の第 5 連では、以下のようにヴォルガが「アジアの産み出す宝」を運び、ロシアの中心地と異民族の住む沿岸地域を連結する、即ち「北を東と近づける」川とされる。

Среди великолепна хода	壮麗なる歩みの中で
Свой простирает Волга ток,	ヴォルガはその流れを広げる
В избыток славного народа	輝ける民族の
Смежает с севером восток;	北を東と近づける
Приносит в области Российски	ロシアの様々な地方に運ばれ行くのは
Плоды, сокровища Азийски;	アジアの産み出す様々な宝
Сребристой влаги шириной	幅広い銀色の水は
Града и села украшает,	町や村を飾り立て
Пространны нивы угобжает	滋養豊かな波が
Своей питательной волной.	広漠たる畑を養っていく

ただし、この詩の主題はあくまでネヴァであり、その趣旨はヴォルガではなくネヴァを称賛することにある。第2連以降の連はそれぞれがシェクスナやヴォルホフといったネヴァ以外のロシアの川に割り当てられており、第 5 連の主題となるヴォルガもここではロシアの多くの川の一つに過ぎない。一方、第1連では以下のようにネヴァが「ロシアの川たちの長」と称えられる。

Я снова песни обращаю,	私は再びお前に歌を捧げる
К тебе, Российских рек глава;	ロシアの川たちの長よ、
Сердечну радость ощущаю,	お前の流れに
Сретая твой поток, Нева!	心からの喜びを覚える、ネヴァよ！
Являешь чистою волною	お前は清らかな波となって
Сердца друзей передо мною.	私に友人たちの心を示す
Твоя струя, как грома глас	お前の流れは、雷の声のように
Строптиву злобу устрашает,	強情な悪意を遠ざけて
Сливаясь с Бельтом возвещает,	バルト海と合流し、こう告げる
Что Россов ЦАРЬ Европу спас. [65]	ロシアのツァーリがヨーロッパを救ったと

65　Нева. 1813 года, в городе Шлиссельбурге // Вестник Европы. 1813. No.17. С. 19.

先に述べたように、ネヴァはロモノーソフやトレジアコフスキーの時代から最も頻繁に頌詩の題材とされた川であり、その形象はサンクト・ペテルブルクの帝権の称揚と直接的に結びついていた。18世紀末にもムラヴィヨフの『ネヴァの女神に』（1794）が書かれ、ネヴァは対トルコ戦争に勝利したロシア国家の象徴としてギリシアの川に対置させられている。[66] フヴォストフのこの作品でも、ネヴァのイメージはヨーロッパを救ったとされるロシアのツァーリ、アレクサンドル 1 世の業績と結びつけられて提示されている。

フョードル・グリンカの詩『ヴォルガの岸辺での夢想 Мечтания на берегах Волги 』（1810作）では、こうしたネヴァのイメージがヴォルガのイメージとともに反転させられている。この詩は先の『ロシア人将校の手紙』のヴォルガ下りの部分に挿入されており、ドナウ、ヴァーフ、ブク、ドニエストル、ドニエプル等、著者が遠征で訪れた土地のさまざまな川についての回想が旅人の思索と入り混じる作品である。ここではネヴァとヴォルガへの言及も見られるが、ネヴァは詩人が青年時代を過ごした首都ペテルブルクの虚飾を連想させる川として、専ら否定的なイメージが付与されている。

И града пышный блеск, смятенье, звук и шум,
Богатство, слава, честь – все смертных обольщенья
Мелькали передо мной, как тень, сновиденья. [67]

華麗な町の輝き、興奮、音やざわめき、
富、栄光、名誉などあらゆる人の誘惑物が
私の前を影や夢のようにちらついていた

これに対しヴォルガは、空虚な都会生活に疲れた詩人の心を癒し、再び幸福を見出す場としてネヴァに対置されている。

Ах! к прежним радостям искать ли вновь путей?
Где, где укроюсь я от мятежа страстей? –
Не при тебе ль, о *рек российских мать и слава*!
О пышна Волга величава!
Мне роком суждено блаженство возвратить
И сердца грустного все раны залечить?
О волжские струи! О холмы возвышенны!
Воскреснут ли при вас дни, счастьем обновленны? [68]

ああ！かつての至福に至る道を再び探すことはできるのか
どこで、どこで私は荒れ狂う欲望から身を隠すことができるのか？

66 *Муравьев.* Стихотворения. С. 234-236.
67 Русский вестник на 1812 год. Ч.20, Кн.12. С. 141.
68 Русский вестник на 1812 год. Ч.20, Кн.12. С. 143.

お前のもとでなくてどこであろう、おおロシアの川の母にして栄光よ！
おお壮麗にして偉大なヴォルガよ！
幸福を取戻し、悲しむ心が負ったあらゆる傷を
癒すべく、私には運命づけられているのか？
おおヴォルガの流れよ！おお聳える丘よ！
幸せを取り戻した日々はお前のもとで蘇るだろうか？

ヴォルガ流域のアジア的性格はこの詩でも看過されており、「ロシアの川の母にして栄光」というヴォルガへの賛辞は「ロシアの川」としての純粋性と共存している。他方、ネヴァは従来「皇帝の川」とされてきた川にも関わらず、ここではロシアの特権的な川としての位置づけは特になされていない。

フヴォストフが提示したヴォルガとネヴァのイメージは、このグリンカのものと対照的である。若い頃にスマローコフやマイコフに親しく接し、「その文学活動の全期間に渡って固い信念に貫かれた筋金入りの古典主義者であり続けた」とされる彼の作風は、19世紀にはしばしば時代遅れと見なされ、嘲笑の的となった。(69) 一時期に複数の表現様式が同時に存在するのは珍しいことではなく、むしろ一般的である。ロシア国家の栄光をネヴァとともに称えるこの詩も、同時代の文学潮流やヴォルガ表象の流れを汲むものではなく、18世紀の頌詩の伝統に連なる作品といえるだろう。

4.3 異教徒ナポレオンと聖なるヴォルガ

戦争期のナショナル・シンボルはしばしば敵のイメージと密接に結びついている。ナポレオン戦争期のヴォルガ表象との関連で特に興味深いのは、上述のようにヴォルガのイメージから排除されていた異民族、アジア的要素が、時に敵であるナポレオンと結びつけられたという点である。

先に引用したセルゲイ・グリンカの『1812年に関する手記』では、同時代のナポレオン戦争が、当時アナロジーとして頻繁に引き合いに出された動乱時代のみでなく、モンゴル支配の時代とも重ね合わされている。また、ジュコフスキーの書簡詩『ヴォエイコフに』(1814)にはより明瞭な類比が現れている。友人のヴォエイコフがナポレオン戦争及びキプチャク・ハン国の旧跡、ヴォルガ下流、カフカース、ドン川下流などを巡る旅から帰還した際に彼に宛てて書かれたこの作品では、その旅路を辿る中でナポレオンが「現代のバトゥ Батый новых дней 」と形容され、キプチャク・ハン国の創設者であった「古のバトゥ Батый древний 」と対置させられる。(70)

このようなナポレオン像を明示的に表現するのではなく、作品全体の枠組みを成り立たせる土台として織り込み、「ロシアの母なる川」としてのヴォルガ表象の特筆すべき例を示し

69 *Лотман Ю.* Д.И. Хвостов // Поэты 1790 - 1810-х годов. С. 424-425.

70 *Жуковский В.А.* Полное собрание сочинений и писем. Т. 1. М., 1999. С. 306-307. なおこの作品ではヴォルガ下流、サレプタのドイツ人入植地が描写されるが、ヴォルガへの言及は現れない。ヴォルガのイメージが、既にこの土地の非ロシア的性格とそぐわなくなっていたため避けられたとも推察される。サレプタについてはアルカージー・ゲルマン、イーゴリ・プレーヴェ（鈴木健夫、半谷史郎訳）『ヴォルガ・ドイツ人：知られざるロシアの歴史』彩流社、2008年、62-64頁。

て見せたのが、アレクサンドル・ヴォストコフ（1781-1864）の手になる『ロシアの川 Российские реки 』（1813）という詩である。

この詩の作者のヴォストコフは、詩人としてのみならずスラヴ文献学者としても当時より広く知られた人物で、中世ロシア文学研究や詩法研究の分野で多くの著作を残している。特に代表的なものは「ロシア詩法について」（1812）と題された論考であり、ここでは言語の特性と詩法との関係が初めて指摘され、ロシアの民衆詩におけるアクセント詩の手法が研究されている。[71]

『ロシアの川』は、直接ナポレオン戦争を背景とした作品である。戦争中にはロシア領内の多くの土地が一時的にナポレオン軍に占領されたが、この詩ではそれらの土地を流れている川が擬人化され、自分たちの母であるヴォルガのために外敵に対して立ち上がるとされている。以下にその全文を引用する。

"Беспечально теки, Волга матушка,
Через всю святую Русь до синя моря;
Что не пил, не мутил тебя лютый враг,
Не багрил своею кровью поганою,
Ни ногой он не топтал берегов твоих,
И в глаза не видал твоих чистых струй!
Он хотел тебя шлемами вычерпать,
Расплескать он хотел тебя веслами;
Но мы за тебя оттерпелися!
И дорого мы взяли за постой с него:
Не по камням, не по бревнам мы течем теперь,
Все по ядрам его и по орудиям;
Он богатствами дно наше вымостил,
Он оставил нам все животы свои!" –
Так вещали перед Волгою матушкой
Свобожденные реки российские;
В их сонме любимы ее дочери:
Ока, с Москвой негодующей,
И с чадами своими сердитый Днепр,
Он с Вязьмой, с Вопью, с Березиной,
И Двина терпеливая с чадами,
С кровавой Полотой и с Улою.
Как возговорит им Волга матушка:
"Исполать вам, реки святой Руси!
Не придет уж лютый враг вашу воду пить;

71 *Песков А.М.* Востоков Александр Христофорович // Русские писатели 1800-1917. Биографический словарь. Т. 1. М., 1989. С. 492-493.

Вы славян поите, лелеете!" [72]

「憂いなく流れよ、母なるヴォルガ、
聖なる全ルーシをぬって蒼き海に至るまで
残忍な敵があなたを飲み、濁らせようとも
異教徒の血で赤く染めようとも
あなたの岸辺を足で踏みつけようとも
あなたの清い流れを目にしようとも！
奴は兜であなたの水を汲もうとし、
櫂であなたの水をこぼそうとしたが
あなたのために、私たちはもう黙っていません！
私たちは奴から高い滞在費をまきあげて
今や石や丸太の間ではなく
奴の砲丸や武器の間を流れています
奴は私たちの底を宝で固め
味方の命を私たちのもとに残して行きました！」
母なるヴォルガの前でこう告げたのは
解放されたロシアの川たち
そこではヴォルガの愛しい娘たち
オカとモスクワがともに怒り
ドニエプルも憤懣やるかたなく
ヴャジマ、ヴォピ、ベレジナといった郎党を引連れ
辛抱強いドヴィナはその郎党たち
血にまみれたポロタ、ウラヤと一緒だ
母なるヴォルガが言うことには
「聖なるルーシの川たちよ、あなた方に栄光あれ！
残忍な敵はもうあなた方の水を飲みには来ないから
スラヴ人の喉を潤し、慈しんでおやり！」

ラトニコフが指摘するように、この詩は「異国の侵略者に対するロシア国民の一致団結した戦い」を擬人化された川の形象によって表現する作品であり、民衆歌謡の様式で書かれている[73]。ヴォストコフは「ロシア詩法について」において民衆歌謡的な手法として純アクセント詩法を挙げ、シラー『孔子の格言』の自身による翻訳をその実例としているが、オルローフは同じ手法の例としてヴォストコフのオリジナル作品からこの詩『ロシアの川』に言及している。[74]

この詩の第 1 行目に現れる「母なるヴォルガ Волга матушка 」という表現は、既に見た

72 Поэты радищвцы. Л., 1979. С. 117.
73 *Ратников.* Русские реки: поэзия и политика. С. 61.
74 *Орлов В.Н.* Востоков // *Востоков А.Х.* Стихотворения. М., 1935. С. 70.

ようにスマローコフ、カラムジンに現れる「母」のイメージを引き継ぐとともに、擬人化されたオカ川やモスクワ川などの「子」の視点からヴォルガを母と位置付けるものであり、親密さを表す指小形が用いられている。さらにこの表現は、オゼレツコフスキーが旅行記の中で伝えているようにヴォルガの民衆的呼称でもあり、詩全体が民衆歌謡の様式を踏まえていることとともに、ヴォルガのイメージをロシアの民衆に近しい川として前面に出すのに与っている。

第2行目には「聖なる全ルーシをぬって蒼き海に至るまで」という詩句が現れる。ここで注意に値するのが「聖なる全ルーシ」という表現である。「蒼き海」という表現はヴォルガの終着地であるカスピ海と解釈するのが妥当と考えられるが、そこまでにヴォルガが辿る行程は周知のように多文化的、多民族的な空間である。ところが、この空間が一まとめに「聖なる」「全ルーシ」と形容され、異文化につながる表現が一切現れていないことで、ヴォルガ沿岸のそうした多様性は看過されてしまう。このように、この詩では等質で民衆的な「ロシア」を象徴する川、「ロシアの川」「母なる川」としてのヴォルガ像が、冒頭の二行で既に明確に提示されている。

この作品の中でヴォストコフの文献学者としての知見をとりわけよく示しているのが、中世ロシアのテクスト、『イーゴリ軍記』からの借用である。オルローフの注釈によれば、第7-8行目の「奴は兜であなたの水を汲もうとし、櫂であなたの水をこぼそうとしたが Он хотел тебя шлемами вычерпать, Расплескать он хотел тебя веслами 」や第13行目の「奴は私たちの底を宝で固め Он богатствами дно наше вымостил 」といった表現には『イーゴリ軍記』からの借用が見られるという[75]。この注では述べられていないが、おそらく前者は「櫂もてヴォルガをしぶかせ給い／兜もてドンの水さえ干し給う Ты бо можеши Волгу веслы раскропити,а Донъ шеломы выльяти 」[76]、後者は「母衣合羽裘など／ありとあるポーロヴェツの衣装をば／沼地や沢へ投げ入れて／衣装の橋を架け渡す орьтъмами и япончицами, и кожухы начашя мосты мостити по болотомъ и грязивымъ мѣстомъ, и всякыми узорочьи Половѣцкыми 」[77] という個所と対応するものと考えられる。

12世紀末にイーゴリ公がポロヴェツ人に対して行った遠征の顛末を背景とする『イーゴリ軍記』では、ロシア諸公の分裂が嘆かれ、終結部ではキリスト教徒のために異教徒と戦う諸侯への祝福によって全叙事詩が以下のように締めくくられる。

> Здрави Князи и дружина, побарая за христьяны на поганыя плъки. Княземъ слава, а дружинѣ Аминь.[78]
>
> キリストの み教え守る 国民のため 異教徒の勢と戦う 候たち 従士ら すこやかにませ！
>
> 候たちに 誉れあれ！従士らに 武勲あれ！

ここで注目したいのは、形容詞「異教徒の поганыя 」の使用である。この語は非キリス

75 *Орлов П.А.* Примечания // Поэты радищвцы. С. 534.

76 Слово о полку Игореве. Библиотека поэта. 3-е издание. Л., 1985. С. 8. 邦訳は木村彰一訳『イーゴリ遠征物語』岩波文庫、1983年、77頁。

77 Слово о полку Игореве. С. 5. 邦訳は木村彰一訳『イーゴリ遠征物語』、32頁。

78 Слово о полку Игореве. С. 11. 邦訳は木村彰一訳『イーゴリ遠征物語』、217-218頁より。

ト教徒である遊牧民を指すが、ヴォストコフは『ロシアの川』の第5行目で、この語を「(ヴォルガを)異教徒の血で кровью поганою 赤く染めようとも」と、専らナポレオン軍の形容として用いている。一方、ジュコフスキーによる『イーゴリ軍記』の近代ロシア語への翻訳(1817-19)ではこの形容詞は «неверные» という語に置き換えられている。[79]

このことから、ヴォストコフはここで敢えて標準的でない表現を用いることで『イーゴリ軍記』との対応関係を補強すると同時に、ナポレオンと中世の遊牧民とのアナロジーを成立させていると考えることができる。即ち、この「異教徒の поганыя 」という形容は、「ナポレオン軍がヴォルガの水を兜で汲もうとし、櫂でこぼそうとした」「川の底を宝で固めた」といった表現とともに、『イーゴリ軍記』の軸となるロシア諸侯とポロヴェツ人という対立構図を、19世紀初頭のロシアとナポレオン軍に重ね合わせているのである。

上述したように、ナポレオン戦争期の敵の表象はしばしば動乱時代のポーランドと重ね合わされたが、セルゲイ・グリンカの『1812年に関する手記』、ジュコフスキーの『ヴォエイコフに』、そしてヴォストコフの『ロシアの川』といったテクストにおいて、ナポレオン軍はモンゴル軍やポロヴェツといったアジア的な敵の表象と結び付けられている。このように「西欧」「アジア」という二重の相貌を与えられた敵のイメージは、その対立項としてのロシアの中の西欧的、アジア的要素をともに覆い隠し、一枚岩的なロシアのイメージを作り上げる。

ナポレオン戦争期のヴォルガ表象も、こうしたロシアのイメージと不可分の関係にある。ヴォストコフが「聖なる全ルーシ」という詩句によってその沿岸地域のアジア性を隠蔽したヴォルガは、もはやカラムジンやドミートリエフの詩におけるように「アジア的要素を内包するロシア帝国」を象徴する川ではない。ヴォルガは今やロシアの民衆の川、「母なる川」であり、二重に「純化」された等質な空間としてのロシアを象徴する川という新しい性格をこの時期になって獲得したのである。

5. 結語

ロシア文化の中に現れるヴォルガには二つの側面がある。即ち、古来多くの民族がラー、イティル、アティルなど様々な名称で呼び、キプチャク・ハン国、カザン・ハン国、アストラハン・ハン国が沿岸に拠点を築き、現在も様々な民族が暮らすエキゾチックな川という一面と、「母なる川」「限りなくロシア的な川」といったロシア人の心の故郷の川としての一面である。そしてこれまで見てきたように、第二の側面が前面に出てきたのは比較的後の時代のことであり、カラムジンに始まる18世紀末から19世紀初頭のロシア詩が、両者の間に架橋を行ってきたのであった。

本稿では、ロシア詩の中のヴォルガが、帝国内の多くの川の一つから国家や君主のイメージと重ね合わされてロシアを代表する大河となり、さらに文化的に等質なロシアの象徴となるまでの過程を追ってきた。なお、最後に注意しておきたいのは、この最終段階で構築された「ロシアの川」というイメージの大きな材料となったのがヴォルガそのものの生の姿というよりはむしろ、既存の文学的伝統や歴史的記憶など、ヴォルガをめぐる様々な文化的現象

79　Слово о полку Игореве. С. 87.

であったことである。旅行や疎開等で多くの文学者が実際にヴォルガを目にする機会を得ても、経験的な観点からヴォルガのロシア性、特殊性に関する新たなイメージが模索されることは、少なくとも詩文学においてはあまりなかった。グリンカの『ロシア人将校の手紙』におけるヴォルガの描写はそうした試みの先駆けと見られるが、詩の分野ではナポレオン戦争終結後にヴャーゼムスキーによって書かれた『ヴォルガの夕べ』(1815-16) が早い例となる。そこではヴォルガ沿岸の特定の場所で切り取られた風景が、「古のロシアの栄光」に関する記憶や、デルジャーヴィンやカラムジンやドミートリエフといった過去にヴォルガを描いた詩人たちへの言及を取り混ぜつつ絵画的に描き出されていく。[80]

とはいえ、ナポレオン戦争期に求められたようにヴォルガがロシアを明確に象徴し、多くの人々の情感に訴える印象的なイメージとなる上で、この川そのものの具体的なイメージは必ずしも必要でなかっただろう。もとより、冒頭でも述べたように、川は全体的なイメージ、俯瞰的イメージを描き出すことが難しく、ましてヴォルガのように長大な川の場合、その源流から河口地域をくまなく旅してその全体像を直接把握し得た人物は極めて少なかったが、このことはむしろ純粋にロシア的な川としての想像上のヴォルガのイメージが無傷のまま膨らむのを可能にしたと考えられる。

この時期のロシア詩の中で図式的に作られた「ロシアの川」「母なる川」といったイメージの上に、文学や美術や映画などが作り出した様々な表象や、個々人のヴォルガ体験といったものが19-20世紀を通じて分厚く折重なっていった。このようにして、「限りなくロシア的な」川としてのヴォルガのイメージは、周辺の諸民族の多様な文化に関する知よりも遥かにリアルであるかのように盛んに表象され、再生産されていったのである。

80 *Вяземский П.А.* Сочинения. Т. 1. М., 1982. С. 67-68.